

テーマ展「近江ゆかりの工匠—刀工・鐺師・鉄砲鍛冶—」展示作品リスト

番号	作品名称	数量	時代	所蔵者	備考
◆刀工					
1	やり 銘 伊勢大掾下坂光広 鍵 銘 伊勢大掾下坂光広	1口	江戸時代 前期	彦根城博物館 (八木原俊長氏寄贈)	下坂鍛冶。
2	かたな 銘 下総大掾藤原兼正	1口	江戸時代 前期	彦根城博物館	越前から近江へ拠点を移す。
3	かたな 銘 下総大掾藤原兼正	1口	江戸時代 前期	彦根城博物館	越前から近江へ拠点を移す。
4	わきざし 銘 下総大掾藤原兼正 脇指 銘 下総大掾藤原兼正	1口	江戸時代 前期	彦根城博物館	越前から近江へ拠点を移す。
5	かたな 銘 村吉作	1口	室町時代	彦根城博物館	蒲生郡に住した助長の系譜に 連なる刀工か。
6	わきざし 銘 江州住人佐々木入道源一峯 脇指 銘 江州住人佐々木入道源一峯	1口	江戸時代 前期	彦根城博物館	一峯二代。
7	わきざし 銘 長曾祢興里入道虎徹 脇指 銘 長曾祢興里入道虎徹	1口	江戸時代 前期	彦根城博物館	近江から越前へ移住した長曾 祢鍛冶の系譜。 甲冑師から刀工となる。
◆鐺師					
8	せいけすかしづば 銘 江州記内 生花透鐺 銘 江州記内	1枚	桃山～ 江戸時代	彦根城博物館 (小笠原信夫氏寄贈)	近江から越前へ移住した鐺 師。 越前記内系鐺師の初代。
9	むしやかせんずだいしょうつば 武者合戦図大小鐺 銘(大)藻柄子喜多河入道宗典製 (小)藻柄子入道宗典行年七十三歳製之	1組	江戸時代 中期	彦根城博物館	彦根彫の創始者。
10	じゅうにしづつば 銘 藻柄子入道宗典製 十二支図鐺 銘 藻柄子入道宗典製	1枚	江戸時代 中期	彦根城博物館	彦根彫の創始者。
11	じんぶつずふち 銘 干英子野村包教 人物図縁 銘 干英子野村包教	1個	江戸時代 中期	個人	宗典門下と考えられる鐺師。
12	きりほうおうずつば 銘 玄珠子往長 桐鳳凰図鐺 銘 玄珠子往長	1枚	江戸時代 享和元年 (1801)	個人	宗典門下と考えられる鐺師。
◆鉄砲鍛冶					
13	とくがわひでただしよじょういなおつくあて 徳川秀忠書状 井伊直継宛	1通	江戸時代 初期	彦根城博物館	重要文化財 彦根藩井伊家文 書。 大坂の陣の鉄砲に関する内容 と考えられる。
14	たちばなもんきんぞうがんひなわじゅう 橘紋金象嵌火縄銃 銘 国友藤兵衛充叔	1挺	江戸時代 後期	彦根城博物館	国友藤兵衛家。
15	ひなわじゅう 銘 一色村惣中 江州国友五藤治教持 火縄銃 銘 一色村惣中 江州国友五藤治教持	1挺	江戸時代 後期	個人	国友五藤治家。
16	ひなわじゅう 銘 国友九兵衛緑寿 火縄銃 銘 国友九兵衛緑寿	1挺	江戸時代 後期	彦根城博物館	国友九兵衛家。
17	はんしやぼうえんきょう 反射望遠鏡	1基	江戸時代 後期	彦根城博物館	国友一貫斎作。

写真解説

*番号は作品リストの番号と一致します。

3 刀 銘 下総大掾藤原兼正 1口

刃長64.8cm 反り1.6cm

江戸時代前期

当館蔵

茎の表には、制作者の名である「下総大掾藤原兼正」、裏には、居住あるいは制作地である「近江州彦根住」と刻まれています。藤原兼正は、江戸時代前期に活躍した刀工で、越前（現・福井県）の刀工としてその名が知られていますが、本作をはじめ、兼正が制作した刀剣には、「彦根」の文字が見られるものが散見することから、彦根においても鍛刀していたことが分かります。

刀身は全体にやや黒味を帯び、地鉄には、無数の横筋が複雑に流れた文様が表れています。一方、刃文には、ゆるやかな曲線を描くのたれや互の目のほか、尖りをもった文様などが表現されており、変化に富んでいます。こうした地鉄、刃の文様は、兼正の作品に多く見ることができます。



8 生花透鐔 銘 江州記内 1枚

径 8.3cm

桃山～江戸時代

当館蔵（小笠原信夫氏寄贈）

梅の枝を桶に生けた文様を透彫りにした鉄地丸形鐔で、文様のみ残し、地の部分は全て取り除いています。枝や蕾は、表面に丸みを帯びた薄肉彫とし、花卉には窪みをつけるなど、文様を立体的に表現しています。

表側の茎櫃の脇には「江州／記内」の銘が切られ、作者は江戸時代を通して越前に拠点を置いた鐔師、記内一派と分かります。この一派の初代は、近江の出身で、後に越前へ移入したと言われてしています。

本作に表された梅の枝が描く自由な曲線をはじめ、粗さを残しつつも滑らかに整えられた鉄の肌合いや柔らかみのある角などから、制作時期は近世初期と考えられます。近世初期は、初代記内が活躍した時期にあたり、銘の「江州」は、記内がもともと近江で活動していたことを裏付けています。

本作は、初代記内と近江との関わりを証明する現存唯一の作例として、大変貴重な資料です。



(部分)

9 武者合戦図大小鐺 1組
むしかつせんず だいしょうづば
 銘 (大)藻柄子喜多河入道宗典製
そうへいし き たがわにゆうどうそうてんせい
 径 (大) 8.2cm (小) 7.9cm
 江戸時代中期
 当館蔵 (井伊家伝来資料)

(小)藻柄子入道宗典行年七十三歳製之
そうへいし にゆうどうそうてんこうねんななじゅうさんさいこれをつくる

近江で活躍した工匠の中でも全国に名が知られた江戸時代中期の鐺師、藻柄子(「もがらし」とも)宗典そうてんの鐺つばです。本作のそれぞれ裏面には「江州彦根住」と銘切られています。宗典の作品には、「江州彦根中藪住」という銘もあり、宗典は、彦根なかやぶの中藪に拠点なかにを置いていたと考えられます。

鐺の両面には、多数の武者と角の生えた異形の者との合戦の様子が表され、いずれも直径10cmにも満たない画面に20人あまりの人物が登場しています。これら人物をはじめ、波や松などを高く彫出しており、平面には魚々ななこ子と呼ばれる細かな粒いろえを鑿たがねで打ち出しています。さらに、赤銅地に金や銅などによって彩色を表す色絵が豊富に使われ、制作者の技巧の高さがうかがえます。こうした高彫や色絵がふんだんに使われた宗典やその門下ひこねぼりの作品は、「彦根彫」と通称され、人気を博しました。



14 橘紋金象嵌火繩銃 銘 国友藤兵衛充 倅 1挺
たちばなもんきんぞうがん ひ なわじゅう めい くにともう べ え じゅうしゅく
 総長124.9cm
 江戸時代後期
 当館蔵 (井伊家伝来資料)

16世紀半ばに鉄砲が伝来すると、ほぼ同時に堺(現・大阪府堺市)や近江の国友村(現・長浜市国友町)において、鉄砲の製造が始まりました。本作は、幕末に活躍した国友の鉄砲鍛冶、国友藤兵衛家くにともう べ え け10代充倅じゅうしゅくが制作した火繩銃です。銃身に彦根藩井伊家の家紋である橘紋きん ぞうがんが金で象嵌きん ぞうがんされていることから、井伊家による発注品であると考えられます。

堺で制作された鉄砲は、装飾的で華麗なものが多いのに対し、国友鍛冶の鉄砲は、実用性に重きを置いたシンプルなデザインのものも多く、本作も家紋を除くと、加飾はほとんど認められません。

